B 80702

きもく三の母ハいとゝしくてう
しゆハ日光月光のしゆをそ
ほさつまくらつけ中天らくれ
つんらくやうやくしやうもやへ
いみしく御手をまへにさいえん
ほとけ十つまにはれからをつきちろ
○この経をよつく四十二のりんをい

くもくこの世にはとこくくてゝ
し給ふ日光月光のひかりをも
はなちまくらつゝ中天にくれ
つんらくらやうやうもしやつ
いみくゆ御ゆきすまふうきいかん
ほくし十つまれかちとつきかう
しこの程とりつく四十二れりんとこ
すきのるれんかもれいてしあか百
まいらうさ百人しのゝくれの大はら
とめひ来まくらふにはうのちやうや
こよ百人ふりこめいちらしてきん人く
そこに百人とうの天の人すたにもは
あくもうりきさまかりはりにはや
せしもうへしかくし出しても一人
もゆきこすてきらわつきる今
まうへやのやうりんいそうのまん
つわいのさくしぬつふつるれゝへつかなう

けらへやういやうんいふしのこ
へわいのとしあつかるみそへつかう
のとうちこみいのらつきまいてえん
またつひきろわきつくみいさせんみ
みひりいうしきれいきもん〈のきん
うこぬめらきりもしこくてあいて
のともよいせわしのなおしとりもね
それからへ（さ）こせんとれし人たかやう
こせんくみしまかしくあんわ給こ
やうやうくきれしりみるふしこけうるて
らくせついおりけぬさくえん〈のきまん
あんいあ一つこれしひあいしきよいをせ
ふあらんわきうしよ（ゆ）きわてハ十方の
もやしおりハらやまさうりけしもく
一きんてうんのひしのそいないあてく
せんかみせらはらつみそてきつこと
とのりの十百へつのぬれそうしは
はくくもりろそうみしくやしとおいふく
せさあのす年しやこせんと云ふ〈御事〉
てらんおん井さいりてらやしやつは
わりふるつましやまおいうれしかりしろま
あいりてなあしかくもこひいやま
そい給へきさりろはしかいこの様のこ

そのゝち（へきりのほしかはこの御のこ
定めぬはとこそ定めさ女しやうよ
月七日ゟして七年ゟけくはこゝろ
事もかなくに御さいあるのて
あくまゆひそてうの沖島と月し
ちひろつ七年ゟくはにしても
事のかはゆりのかん毎月十八日よ
かけらやとらくも云てそまかん
あんかくもゆしいくも見はつる
ゟそもつてとや後へは青くりそてかた
まふちにきんすのあゆきうし
けりくしらんおん入千はつの定
うくとみはもろのふてゆつかしこ
もかふゆかうろりぬま（と申そうる

ちやしやきのく夏めらせられ
けるおさけれつゆやゝやみ出よ
そのからしのそみかつめらんせめん
あこう千三ぬ〱ほかいゑん十九ゟ
かしいわりをされ寺しやうのらんと
みくすいかくしやらくみしとら
むかふちの母いらんせそのりとて

みく□かしく□かし□く

むねふちのはらんみそのりこかは

つりてつましかくさるゝはにほひみせ

せふらへにしやうけなりけんとをそ

まへいちうあくしうくなきみつく

をきすくろくはなけきうきや

かへらいもんせんかくつまへらくれ

やへみくはしわかりはもんせん

おくやいふりろくのるみる

とよのわるよしにけるへめんのまと

きそてけらしそのみれそさらるを

それておもくやうしまうつのはうか

きんりのかしこすれさくてあれ

きかいえろれきあとあれにかくし

ころそれ川とえれとうもりりりの一

人のこかんへゆおそくけつゝそうを

いうもとおかゆけうらやいやさるく

ならましけつはわまくにおしくろれ

くはまをみせいくえんにやくそれなく

くしやゆそまへいらうゝあらわた

ほしりけるとうえきよりはして

ならしやまいはへおみれわすは

いわひくいうきやくへうはつて

はるのくまいろん一りのて七□め

しかるひくいうきみやうへかゝて
けるうくゑいえんけりて七月のつ
しきえの月めくらんれひうとれ
給ふらりのもみまいとのまくらね
りけり寸わつるみそてうかりしき寸三人
いるやなみあうすしにしろうひくなる
とい申まうへかへさうしけうあのさへ
うくうしきなふ月日にせれゆや
すへされいあつましきうりしは
こせん又ゑいめんけりてきん四
とられのふよりあもみまいうてなるの
まりておいしほすれすのはきんへちう
うのとうくゑふてすつのうのと寸くとうへ
ていねうろうつきてすつかしれ
りしうりにさるひらのえらのせ
いうんいまてはふかふまうのまれいこする
いやうりのかりつし

けりけるゑ三人のよりつまみめにやさ

ゆうほどに三人のよつてみめうやう
まゐりけるにせんいうむすめを
れうらくのぬまでいとりもちまし
よつねはいかにそのめにもうらし
三人のもろもろともうさをらしを
ゆかぬわけにはやくおんらて千
あやまりまうまくあひうるへしに
ちいちはいつてもつりのかまもる
きみへらとうてかみにくみことも
じんれいさのわかしかくゆかす
るはさくまきへいもあれしまん
人のいのちかいやとはしてめひ
いくりのきうてもぬものあやのいかう
とうれとれいもやぬかやしもゐく
まじかしきけとうりやとすゆび
れいへのまいもんけくうへくと
こゑしぬけのうんいゆりへおもしは
くさちんをこれせよううものしきけ
もとふ事つけゆくきうんともかし
ゆよおうのゆさくみかけまいとめ
そのらしみひまかりとはなてわ
ふみてこまびさいこのしとはゆく
おしゆやさゆうれゆらしみやせさ

おしろきけりれけるしわせるい
さてよわれおしきしかふらせらやい
こせんのしのしきちいとむさみなて
のたは殊くおもてみちへとおけさそ
まふとりてしもこそのありし
おれらくのあしかりもりこ
りやさんにうよのいはてみくの
うくねありてらえくしのきちさ
はよりつきくとあへりしそすへは
しありくそりゐかれいあるいとる
あらきあへしぬきらみこのしとは
御つくつしへのさくりそかれ給り
りていあれさるあくるるへゆりき
まやすにとおりゆくわうちとて
やらつかるまめしきてしうけりぬ
おきうへ

ねおふやさしとおもふ程さきのふすまそ
ちかのゑやかぬいへれあるやしのけへ
れまんのらしいうきのとてのを
しきらんはつるふきさこゑあへ

しきらんはことにさきこえ御事の
新月せんそうのことにて候ところさま候へん
もうし候やうにさきのあさましくおもはれ
らうたやのうはみなへ御事をみなあ
とよりいまするつねりうのおし
せんさんのあさくにつみとく候よ
ふやしやとをらすらとし
いうこゑかしとりてうち七月二七日
御文はいつのたびとてく四十九日より
ぬききすかうて百ケ日にいたるさ
うしは御ともそひきてとくあるく
とらみあらのかさいまうつもうす
うつほとはらはれたちやちのちやう
まいらにつもしゆかくしとら
まいらへとくれあるへくのことれはか
あひきにいはうつとやくらてもいらせ
はしうえ御ないのうきはあるへし
申候人いのちとはらうとはぞえ
いまれさすのくしくいはれまくとおもり
そのあるくいうしもゆかりたえふん
とて女房こうらこ百へまつらのゆ
めへりりあらい
ちくらやしやの

さくらやめ
りんかう
より

ちやくしやにけらてまやいめにまいる
けいえるかくてすれとも[illegible]
わか日めつまくゝ[illegible]
[illegible]そうひきて人へまいらせて
かすかすのせ今すいとも人すみく
かへやうにわすれみえの[illegible]
らみうかいかけと侍さうれ
めうらはふうの[illegible]ん
あらくてめらさうやいうる人
いうにみりて給はすやう人よひ
さひけうゐはへいそうらせいらへ
めつらしの袖とひきあまりすかく
人のみ[illegible]みてもいう[illegible]
[illegible]うへめうつよみえてお[illegible]
[illegible]

こえんのはるみえておほく

やりうらりつねのこれいかやく

けるをりみちとおもひさらし

りくくこせんたまいりたけりにけり

悲人のよすまにふ入はふまうとさ

うられくくえへりをおけ斗

まうすこせんをうつわとかゝえ

くおいすれいそてうおしすへきのこ

うへいふりくみつなしゃやらやや

あまたけりけれてありあめくへの

いしみわらうらんせ思ゝしてある

うくみおみてくゐまう由・今それいに

せいりけ者候うんらんへらい

しきくみへ

さありく

しうりく

そわらぬ

ん

つくいはらとちやけり

けはなりて習みりつらみなりに

びとおりうらてうまうえん由りぬ

とめくゝうしお稀のへとうやけいや

まくうしおもくるころりけうし流へ

とかくこしらへ給ふ事をとかくしけれはあ
まうてもくやしきわざかなとけしきはみへ
きこえ給ふもみだれきこえさせぬから
るつきやうもみちらさせ給へ
のやうに心やすくはまいらんとのらん
あらはとてめへくるのしつまりや
つよしもなくられおもふらやす、
ぐくをゐしらてそのましてたにそ
てうつすかりけりくを一まつとも
れらんあんあはてにおもふしくせ
すいらしもへかひくそもて
れいみちのいてにもまれぬく
ところの御ひめくいてつまく
のあられいえいそのくいれて十日
てまうす給ふらんあんのひなし
うくはりの御へいはりをみゆ
きこえありきさてのこゑのい
くくとかうらいけりいのはくり
さいうふいふくもゝやとうろうてそ
つはかけくらくうとくかゝ
まひやうんとのふこゆへ給ふ給く
かいれたかかりしきのゆくにうけく
ちこの大しこうへしに御まつらせ
にうつるまやあらしあつゝらかた

いとこのたいにうへにしみえつはらなむや
めつらしやあるましなるらむのなこ
せたらやぬいへはいけかなくさむひ
の世のあまへはさなくらのなみ
よのとりかへてさむひはしちかやま
もまとみきえぬらうへとおなり
とおぬいはしをはゆらゆのなすのし
うれしとこそおもはさらなむすれし
わらはかくれてものうへよく
やまさりこの山乃君よし祢しく
すゝめしみ後へまいりけるにみさいすゝ
りてゆかりやゝくらぬめゝそ
れうてけきらやまとゝおもし
うゆくいふかくゆゝすくもしや
いまたしまへいものされこゝとくえ
のとくはしめひまもらひうへてやくし
あてゆかはいうみ京のとより
てふひ後へとをもゆいゆりしても
けるへかりかちておもひさん
まいらはすこ十日まてかねりに
かまとたりもしるへしいとはあさ
日おひていたのいりいてうちきえん
ゆうつのてみ寿つるとをくはか
くはゆきものとゆへうきえん

くみしきくめのとゝうて宜しく候ん
仰とゝめつまらくくうかゝめく
くひようんはすかの幸いゝまゝゆく
まゝく有人ゐはうれしさんかゝお
ちんかんまゐらくとみゐらせとらの色
て有ほすの住けゝ仰く有かゝ
くふれしゝ百さゝ百らんのたへ
とうくこゝ進めのうかすこゝ〇くく年
うゝく細て御才とらやゝやる
よへいゝけるきこゝ申めいく
いゝ給へ有人ゐくの使へいゝ有ゝかゝ
まかく めでたきけのたら
よそくらひくそのよりりてかや
こなんのくゝめ進ゝ幸す
ありかくゝ幸うへくいよつたら
いゝこなんのもかせはやゝ
よ〇さらふそけ給へく
よもこせ…

おめくたかゝ
まゝく
有人ゐ
めく
よろしく
うゝ

きこえのいみこそおもくいみを
みくわんのさけはうすくみつて
らうせんとやまのうきはいつか
たいりいらん斎への御ゆくひきを
ざけはりとして御みへのみゆものゝ
よらさして斎へのいはくうま
くら物うきさもつりのさせへうき
わりのらはつきはらの重いわらて
うてらうさすてらやしものひ
わゝんはくのいくいまるこすむさ
あらしたやのらくせんかさ
うほらへさけさぬすみ御もいつさ
らみけらは事ういくはへはうに
らりまそりさこてのつるこよし
とらく物白とくしくる気の
のみそい公つくわけくれしまめて
うら勢斎へ古とするへもあめのさい
うゐへきとすけくりつうりして女房

かくいひてすだれのうちへいりて女房
どもにきかせけれはやうやういけさまのめ
らんあたりてみなそへてのてく百
おもの百よつぬりはちつくりえ
ゐまらやうやまりすへかはめつを
すゝくやましきにもちくせさめ
かしちくうつゝかゆくうすみくい
侍ん女ちとおもいゆふ女房けるありく
よくさをつかへくわへすやうりし出
めとなこゝのくこひこ事ひめつ
こらやうやまうのかいきえれは
らぬよみくしね事うなおりて
ゆゑんとおもひらこの名いかり
かうくしとゝつてやすくこつま
やうゝ第くまくへの令りけつゝ出
ひるにちかりゝとゝそてわかくゝ
女房やうゝ事んへなきてそさ色
さふてさやよめるゝしのかゝは
うやこせんみゆかれゆきさくひくま
やまゐりてくゐにゆめ侍へ事九
なかりてそりけら事今のこのしきて
しきうしはいろうけものふ娘
しょくへくぬるいふそいひけれはいよ
事んのつゝし

しきくぬるすといひけるはいよ
商人かのさし人の世にはすつさく
みなかくみすくなとなしける商人か
それよの代に世わたりともうくしは
すなはくみきんをくつかく物らこ
うるしてする物かたり女房このしと
やくなき事はいのらしすか商人かとみ
いとけなきつまにこわると一すしくし
てくかのくやわくみぬしひとつく
あまらやしやよわのかしくなをし
めりてわきいらしはみかの世へしあやか
まうしける商人なこのうちてこ
らふれはりのまうけ一しみち人の
ようとのとく商いけすとはらひとの
色一しおうんよはなり一てんぬや
ことをうけても七しゆやつくしの
ひけよすなはち商人は三世ならさ
たちまちみやかいせうけてこひくら
くろあけはうちのへ日本へや
これらりうやすまりは九百やう
おしあや八百しやさしともりはた
百しやうやつめいとわりは七百や
ちをしせはわりは六百しやむすり
かしきよくしは三百しやくてつの

もさし……
のたまことをもしはうるさしやとてつめ
こゝのあひたに二日しやみちとほくは
ものやむかしのうちあはれなる日をやそれ
らうたくしにゆうしくやうさうくらう
ミなもとのいたうしをわかきはかなくて
あらくさうめくひとのうへまかりひ
いてすゝてゆかれけれはこそむ
けきいやうゝゝるをくゆけつらうきて
のかなんいまきてのうかはしたる
そのめさとうしめしはうらなんへる
まうつやうはいりてしのしくなうつ給
せいそのすちてそけのちまへらへそそく
きんりもそうつみにはしけくらや
いやはうのにへうそけうあ命この
しとやそりけりにわつくされらのり
つまてきうめくひとらぬるにもなう
らやうやはうりのにへいうくすりのあん
あるくきまつゝのしほうくすてはなか
うきすそひて侍そさうらし
ゆもまんもんのあへうした入そゝうく
まうかそんなりしつれけうてもと
とらうくしややりけいそもはあひ
のなしはきふてそつくにいみして

のたまはせてつくこゝろもとなきを
わりなきけにまはかなしと思ひたまへ
なりける

きちやうのほころひこのかみまきては
はうしくちかうゐのひろひさし
いぬきみはけしきのしきまよひ
とうくみわくつぬるはゝてぬ
むつこともすへきかたなくゝ尺の中
まうへりいつくみなきつゝふるぬ
御ふところにゆきをけちてうへし
よくしけきみせよといへしきやそ
きりうりけしたるへのおらむよ
そこのうちまよつへふけ年れ
宮すおつくしたるのあまい十みの十
白あつりてしてきとは中やうへ
つてきうへつれは中けれと
しすみこうつ物くいは中すて
さうちは宮らみきつゝめくりたに
御まへこゆうへのあつれみさら
らくうちかへすうそこつ中くら
ゐさうへとおとしてさうつねやし
つきみこの

さきみこのしきくりもはくさめ
うはあかりもこれとはみのさは
人ぬりくさてゆみやこてまたれ
わくいゆしぬしとやかうし
しわもちやみなへ一まさえてかは
いとあんとまりきうまうのつかほ
こうしときてこせへあありしなほこ
らもしきみえろとゆほてうく
みせうしろしつとはてかてこ
またのきはすきうゆをのらは
いまさきてこせしもすつもは
えしはへろか母りてかうさこ
はすくさいのらとうのくしさく
もあめへきわつゝみちたまいつて
あと人れまりてしらうち暫しにちる
しまんてはらへうへてそうく
みやめもゆえらもらいはさろく
まうかりみくすはゆさくて
はらえんとうよはきすきみやせ
いろとうすめくやましをとや
きうつうりのやのたまき一
ゆむてやしやうこそみなか
はしさやまゆかりのさ、なしめつ

ゆくさきやはやかりけるさしたるかたも
いかゞやさしきまらうどといひやさしく
しらひのすへしとやけまいらせん
ここらもろもろともにしろふるひとて
つきのりもいだされみへぬめりつゝ
きえぬみけるいまはまよはずく
してそろくのさきぬとこのこと
いりいまりてこゝのみへばうずた
ゆくえいかめしのかゝらやうやと
なりゐれくるするらのへて
さへくらうけり

さるほどにふじ山のせう若
くちやぬるけくくとおもひけり
きこゆのゆかれてつしさろし

さはほかにふしまえのせうそこ
くちぬるはくくとおもひけり
きこせんのみくれとしさくらし
みろろすわるとうあひかう今も
いさしやきりかいらあさしゆる
うるすしくすてよれろんまあふん
くらりんきとあくしてゆるきぬ
かんらくあのかんきりのてやけり
いられのもめるかろていけろそ
めいらもはいろろきいきれの
ゑありしろきるともけらてきゆ
ろくまうゆるもやろてけすへ
しとぬけれはあはるりれわる
くらあられゆり徳とうとあり
あるへもうるるくすしききんとの
くるふけてもをみけされとめ
けりてのらすそひうもり
やくくやもとのみをさるや
いふもるのいましてへる今て
ちかろうあてうきてけをわる
こあはりてあをいあこれりみ
のいちやけりゆあくいる
えしきのけのかいるふすうやう

くふゆものをはしめくさらんあまたゝ
しきこしつれのとりまさりて
きようらはあれめくりもあまた
しとめやりはけしへもとく
ふのうてにうへのきさ人
ちとまゆさきをとつこしめつるそ
こよろくうれつしもすかく
ゑくきこりゆくりかの

さりやうへのみゆかはなからふ
しかとのろうしにやうしこゝろふ
おもふへもけに女人もみて給ふ○
くものこゝろいまくるて山ゐと
ひろへしうくらてしやるわ
えりをらもはへうあつれなつ
つねら見さらこあれしらぬまてしぬ
しつうりきさえわきらくとまろめの
ふさのつきよれうくゆさけりそ
きよりのもかしまうすうらへきく
けきみとしゑはらうへよかのなけ
こ給へともあつきとうつらのしは

けしきみしともはらへるなかなけ
こゝろはもあはれとこゝろのうちにも
おもへのようつきんもしにてをより
ゆめのくゆくへきこりもしらや
しことろのうはこれもおもふ
なくなしにせつなくしもかなく
さりみちひはつらくことなるをかた
ともあまたにもわすれいそらく
うらへきあつらもかしきのはかなと
うく言けるはうへみようこそみせつら
くらゆらうらのはうらしつるし
みうしやられそてわきてとつき
てかなやうこうてゆくや君へあはきこ
らぬうやおもわすれなかもさし
きそよぬもうきうたにとめゆくなと
うやとうれもにほへるらなく
こゝふのてはいふことならぬかも
とりくゆきさうしくかいえし
まれあてゝつはのあまそへそに
いろやちのよみ君へかいらへもきさ
めそめくとひとはあけかさう
らはしかしいとそきはれ見え
みにうらみらはもちみよのみもし
しちりいめいせ君まのてさら

あさりのんいとわりなみよみなし
しはきいかれは毎木の花ちらしく
よしをやうぬるやうしもやふきしと
はるかれしとひのくそりつきり
かさなふうめりてはつきのしとあれを
こくよりてみなえはよりていつてをぬ
よりかのし わかはりうれありけ
こなかりはきりくやかはなそうすい
まて てそれぬえ よそうてすいま
ゆくみらのくさしさすわてうそうへ
ふりかうわけりうはくもうへさのぬ
さしくせんにえんるかへにこれしきあ
くちやうしやあくつかねむけりし
つきもよこのはくしかしくたまね
わのせいまんいひるあしくまいも
けやとかうかうめいくへそらさきて
さやかひらくくれらはいりはまるひ
しもくこせんはぬいえてくのとく
ゐちさいかてやうしにそらそうて
そすもはとなへしそするからつす
てさとえてちさうかうるくかし
まいのみまはるいふえりけうかう
らそうへりもえへのうつえみくと
えてこうへいみみそけしやまきて

ちきることはみゆるけふもやはらかく
いのちあやふくなりにけりいらく
とかくひはくぬるらんはらはらん
こしかたへこえのちよみおもはるる
よをわきくはをひろけしもせ
このよをわたりてすくるとものの
みやまへみらつおもひのくとの
たのめをよいまんらかはしてけ
まいはのつのみありしこれは
さくへのきゆるしのてしとろ
やはらかそてけふおもひのか
よせはやらてゆめをかけし
かのまとつらのくのなかけれく
こうつはすくくらやたにそ
わかみなおもふうちもぬらくかさ
しおもひのまへしてみらはなす
まなきもらはりてきつつそ
へ
いまありてかへらとうもひらや
ちくらまわつすへへん
やまおもへとくあのつてはせるは
うへのものをともしまくいはにお
あしをぬきれてしもあるれにはん
ふりらはびゆきあのとものみ

こゝろはうひゆきあのことゝものゝみ
まくらてはしはまれにこそ
わをゆるまにめしつきうひくわゝふみ
いのちとみすまをふかくありこそし
ぬるくれなんあいもまうりはやゆ
こはりもはへいゆめのしきぬはくも
はるゝあはしもすまはいひわんすへけ
くまいくけれ

うつほもちつらやゝやはあまられ
えわうえんのちとうりらやうた
まとあつし日とうしはへとゆりむし
あつけのはあのけら月日にせんわ
すへはまいふのふまいと思ひゆのをは
むけぬ日しちやゝやはやゝにうて
をうふかのきうまいすゝのほへ
ようしこうりらわまする申こと
ちやしやうへてはくもこ申んれ
れんおしやのふつやきうういつゝる
ゐしはなりやすやゆめもお〳〵はた
うかけまいちやうつくおほせな
なぬまうこはつるうふやすゝう

うちはきにもやまひのくおほせける
なぬもうこゝろうふはしてきこゆる
のりんへりいれてうたてさもいそなん
きこえさせ給ふほとにかさんなこの十日
くはこせんめいまうしにはやんめい
けふこえたるもいゆるいえへ書
すこしや給ひくいのこせんもかきりにし
あくあかり給ひしえへのはいつかみそい
はくとらくもとろのいすいらす
しやうを給ひんとめをねにてえん
さりわしをんまのあまつけこをき
こひにふかりてさうせいつ
やうてあはりにはかいとみてく
さてまれとよろこひけりくらせん
おもひまひくえへのまゝもしゆき
くこちせ給ひしときにせ給ふはきこえ
うゐつかりもあはしもかへたしみの
あまとみくすひとてえんかくあはら
よてこれとうあさきにあとあひてそ
おもしける

もやこねりしあやうていりのあまへ
みくあけ

もやこゆるよをあかしつゝいつのまにかへ
あくらひはるやこよひてはらへ
へはりひつくらしおつきすれしまゐ
ほらへすくらうやゆくゑともやと
ありけれはかつるをきをはりのすく
こほりゆくすゑいきつのみのあ
わやさもうくきりつやうゑしく
やをいぬかいをそうきしけつやうく
いりくりぬまうこはうつゆくゑいふ
とるけやうらぬかいおはやきも
ありてはるはほりまやとおもては
ありきてはあらわかんなめく
いのみなはるかけさきつゝいふ
ほしのあにちうしゆやつり
ことあわりのこちにぬかつらう
こひりちかつらいふそすをとる
たりつるれいへまゝりつゆとほ
ゑしゃありやこのうらか
つゝるそとすむしおけやわかや
きらむりそそのゝしにちつらく
いけくそつれしぬすもとほけつ
わんしやいまうみゆえうのせん
とぬゆるうすかりとのつここて
ひはぬいゆみ

とぬけしをふすかなりくのこまて
やくやかせぬうけはかりてをかしく
すまひろうひくうつとやうくさか
うちゆけいそれけうらやしやみゆる
とけもしてあるこみつをはゆ
つも人くいうさきもしありわさ
えのこえとうつこそらやゝの
きんさんはいまへてわかはさらや
かつかのおりけくそらやらすし
とゆろしてそれしも人もちはゆわ
りいるちそうろうわれいさみさへ
しもおうしすわかもとありてう
ろちつはうつ人よてちやゝやもる
まはうりてゆう人すうしにふのいふ
のておうしえしてはうこをゆて
そうとくみりくはとあつうくた
わらとつさうやうはうひうるて
おりくあかしもそのすみなそ
うりしはか

ちゝやのはゝきゝにかゝりく
らんすなぬもかうらんはこそてぬ
ほくそりしありすこてのつはり
いさしやはくりいらやうやと給さく
ろうしさみあはりぬもつのきこはか
とくしなひまくりかつみいよるさ
まいやきりてとめしさいとなんすも
まあみそうかけかのしあさうれのく
あまはしあしかは足給のくふしさ
かい…ろくのはすしつく
のらんすうしにつきうこうしいはうの
しまいせ人うしちすけゆくつ
こうしゆやぬようすはらやうや
此よこまりてしこ上をゆめ
うやうりかろうぬとありて申み
りうとなけき給へとりまくしたゆさつ
人あれいうあちよみはうのあめく
いすりきりのきすれあふ給のわかせ
いおしくくあふまいらくまいう
さいうんのちはうかきつまあひかてす
いめし つくつこ事つはいまはうし成

御まうさん候へくやまのいちや御
きこしめし御事にて御まいらせ候
うあくわれしけこゑへおゝ
よすけの〳〵たにやく〳〵にのみか
よろこ〳〵みえまゐらせ候
わそやうしやゆうてゝもゐ
わからうくわきとぬすめいすまいらせ
うのはへちやこのしまうし
すゝこちまゐりまいらせ候
めらいさせ候ゐぬりとらく
うくわかの申させこせ人の御
えしりいちやすやうけか
いかの申させいる御しにすて
その御いのはへまゐらせ候
あらいはやくおゐしもえんぬ
うひをまゐらせ候やとく
よかとすてのあるうれやの
あいくゆさこちすめ

わつきみさらくれまいりわさる
はくしきのめらいつのせく

わつさみゝよろこひまいらせ候あわ〳〵めてたく
ねんころのみおいらの事よりも
ちこ事せんのすゝゑをかへしせん
きこゆるみちへとまいりさしへおもい
うのさまもめくらし月なさる
われもめてたくいさしかくほよれ
めりてたへようもうりやうこせんの
ちかやうのおかたのおいけつきみ
いさまちみちふけてまつる
やくうつかぬとはうりてこせんへさき
まいりつりとはめてくれしさし
こゝろへられ候らしやわらみ
きんのなるかいしまいらせ候
あいかうのたいらのきさはなしん
まゐらせてやうめでたくしふうこのむから
かうつうゝやかはのゆてしまいらせ
でたしかさうゐすゑくつ一筆と
りはてまうしの日まて申
返〳〵さんはしとみゝ月ころしとう

せう
かし
いう

三よたせん世々とてしるすなり
ときふまうんにのちからぬ
こうたしめてけこせんいけふはく
はしやかりもはうゆきさとはにさ
うてうんにはあらにふていつき
もうしにそうあふららやこやこ
のくをこうひすまつくらやうやく
ゆかりもけしてえつとてしまふ
これよのあるるやさしやゆやをも
かりもけとらうのくくるさ
ちむくそうそすいらつみみなめ
せうやうはしこいきんさけり
わつふみおりやう居はせのて居こ
けいやこもりかりきんてるこて
すはなうそまもぬきうんにちのら
きしうきてにのよ百人みらやや
たてあんのまんとくし
わうらは　けうるや
あるとうこ年

ねこせんときてうのつねにいきこ
しはりあるれて見れみえしき
まうりふそのあらはれてしけりやなは
こせんいしろしらてふかのしその
てつらせすのしえにすなをそきくまへ
しめつそい月日みえつのまいりそり
てそらは此しのしくれつきつまみ
つるもみすをいそしまうりつら
三すのしえにすむしさぬくつてわ
わくい月日つきのもろうてえま
からん此りしのりくれこのみなと
とかなりけりきのりえんとい
あしもよつはぬきくうんはいすへ
しのふかのわうかいはしやは
なまのすりつくみえんうくしてある
りんそとに玉すのつきえさうし
へくにてんらのあんらくとみ
らくらうのあんきのあんらくあれ
くいのんそのうきてくもろろ
わしせんにきへりしうふとそりく
そかうしむかいとそれくうちへと
りうくしいきんをおこすへし
そのあいやしはあしまいすきさく

さしのゆうさいにしのわうかいにしよは
まよりすりろくみえんうくしるゝ
りうぜうしにゑしのうちをみきうし
へくをてんらのあんらくのあん
らくようのあんちのあんらみおん
くのらんぞうじふくもろう
わしせんをちへりじうふとそうふく
をうくじうふとれしくあちへと
りうくしひちんとおこすへし
そのかいしはさよ分すちえんく
もらくほすゑらへやうらくに
わせんりそをゆうにあるき
その月のやほうのゆうくみいおち
をゐ世しらゆぬくい極のとさ
之しこ吉日月廿せいらんし

A 60
6511

B 80792